

# AK 盤の成立過程とラジオ放送での運用について

## — ディスコグラフィを基幹とした考察 —

毛利 真人<sup>1)</sup>・大久保 真利子<sup>2)</sup>\*

<sup>1)</sup>レコード史家，ボン大学日本・韓国研究専攻 招聘研究員

<sup>2)</sup>九州大学総合研究博物館 専門研究員：〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

\*okubo.mariko.946@m.kyushu-u.ac.jp

**要旨：**AK 盤とは、日本放送協会が1940年代にラジオ放送に使用していた放送専用レコードの規格名称である。その名称は、日本放送協会のコールサイン「JOAK」から採られている。なお、日本コロムビアが戦後に発行した教育レコードも規格記号として AK が用いられたがラジオ放送用の AK 盤とは関係がなく、区別する必要がある。本稿では、AK 盤の成立過程とその運用、作成時期と放送日との相関性について考察する。

**キーワード：**SP レコード，AK 盤，JOAK，ラジオ放送

### はじめに

SP レコードのコレクターの間では古くから AK 盤の存在が知られてきた。しかし現在に至るまでその全貌は知られておらず、放送局から流出した AK 盤がコレクターズアイテムとして流通しているに過ぎない。本稿は毛利が長年収集してきた AK 盤のディスコグラフィカルな情報をもとに、ラジオ放送とレコードとの関係について広く考察するものである<sup>1)</sup>。

### 1. AK 盤が作成された経緯

ラジオ放送は1925年3月1日に東京放送局が開始した試験送信の時点から市販のレコードを消極的にはあるが放送に使用してきた。ラジオ放送を管轄する逓信省は当初、「放送用私設無線電話監督事務処理細則」（1924年2月16日制定）で娯楽放送に関しては原則として生放送とし、レコードはなるべく使用しないことを定めた。これはラジオ放送が民業であるレコード産業を圧迫すると考えられていたためと考えられる。しかしながら1925年7月に開始した「西洋音楽講座」のような音楽番組には

レコードを使用せざるを得ず、そのような場合には海外から輸入した洋楽レコードが使用された。直接利害関係のない海外レーベルの輸入レコードであれば日本国内のレコード業界とも折り合いがついたのであろう。昭和期に入るとラジオ放送とレコード業界は歩み寄りをみせ、各レコード会社が毎月発行する新譜レコードの楽曲をラジオで生放送するという宣伝的な性格の放送も頻繁に行なわれた。1934年5月2日に公布された著作権法改正によって、製作者や著作者（この場合は録音した実演家）を明らかにすれば、レコードを自由に放送や興行に使用することが可能となった。この著作権法改正によって市販のレコードを用いた番組編成への門戸が開かれ、定時放送の「朝の音楽」や1931年に設けられた第二放送（1939年に都市放送に改称）の「名曲鑑賞」（1935年9月12日開始）などのレコード番組が現われた。

市販のレコードが放送に用いられる一方で、日本放送協会は自前の録音を放送に活かす試みも進めていた。その経緯を1937年度から1941年度の『ラジオ年鑑』でたどると、放送用音源の録音は鋼帯式の磁気録音機（1936年に導入）とディスク式録音機、フィルム式録音装置（1939年に導入）が併用された。しかし鋼帯式磁気録音は長時間の録音が可能な反面、音質が悪いという欠点があった。

長時間の利点を活かし、昼間の放送を録音して夜間の海外放送に使用されたが一台しかないマルコニー社製録音・再生機を酷使したため1942年以降は使用されなくなった。フィルム式録音装置は音質こそ良好だったが編集が困難で即時性を要する放送には不向きであった。こうした点から構造的に簡便で資材不足に陥っても録音用素材の代替が利くディスク式録音機が定着した〔山崎 1998〕。

1938年12月、内幸町に最新設備を備えた放送会館が竣工し、レコード放送の環境も大幅に拡充された。日本放送協会は1940年には前述の鋼帯式磁気録音機、フィルム式録音装置に加えて、海外放送用の仏マルコニー社製ディスク録音機（固定式、1941年に可搬式を追加）、独テレフンケン社製ディスク式録音機（可搬）、その国産化機種である日本電波製ディスク式録音機（可搬）の三種を稼働していた。これらのディスク式録音機はアセテート盤に音溝をカッティングする方式であった。録音ディスクには輸入したアセテート盤が用いられ、やがて輸入品の枯渇に備えて1930年代後半に国産化された録音ディスクへと移行した。ラジオ放送におけるアセテート録音盤の使用枚数は、『ラジオ年鑑 昭和16年版』によれば1938年までは月平均100枚ほどであったのが、1938年春に竣工した東京内幸町の放送会館に移ってからは400～500枚とぐんと増え、1940年7月には800枚に達した（p. 220）。NHK アーカイブスの「ラジオの時代の貴重な遺産」では「1937（昭和12）年には1か月80枚程度だったのが、1938年末には150枚、1941年には1000枚を超えるようになった。」と数字に差異があるが、いずれにせよアセテート録音盤の使用率は1940年になって飛躍的に高まっていた。

放送された音源や放送のために製作された音源の一部はレコード会社でシェラック盤にプレスされた。繰り返し放送用に供するにはアセテート盤は耐久性の面で難があり、市販の商品と同じシェラック製レコードの耐久度が求められたのだ。放送用の素材として日本コロムビア製の「千鳥の曲」（日本放送協会 A-401-A）、「君か代・さくら」（日本放送協会 A-401-B）が確認されている。規格番号のAは委託製造盤や特別製造盤に当てられた記号であり、このレコードが日本放送協会の委託によって製作されたことを示している。放送された音声のうち重要なものは市販もされた。1938年11月3日（この日は明治節であった）午前9時10分、当時の内閣総理大臣・近衛文麿は総理大臣官邸から重大声明を中継放送した。の

ちに「新東亜秩序声明」と呼ばれる声明の中継放送は録音され、同日午後7時30分から再放送された。この放送録音は演説「新東亜の建設と国民の覚悟」（コロムビア J-1013/1014 1938年12月）および「新東亜の建設」（ビクター Z-111/112 1939年2月新譜）として市販されたのである。これを前例として平沼騏一郎「大命を拝して」（A-1016 / 1939年1月6日放送）、阿部信行「大命を拝して」（A-1020 / 1939年8月30日放送）のように歴代総理大臣や重臣の放送録音のレコード化はしばしば行なわれるようになった。

JOAK が本格的に放送用レコードの運用をはじめたのは1940年のことである。紀元二千六百年が挙国一致の国家事業として大規模な盛り上がりをもせたこの年、放送用録音はニュースに活用され、また編集されることによって特集番組の可能性を広げた。好評を得た番組は録音によって再放送されるようになった。たとえば1936年から放送されていた国民歌謡はそれまで生放送で同じ楽曲を放送していたのが、録音によって定時に再放送することが可能となった。「航空日本の歌」と「燃ゆる大空」は藤山一郎の独唱、日本放送合唱団の合唱、東京放送管弦楽団で1940年9月24日から27日まで連日夜の7時台に放送されている。同様にほかの国民歌謡も同じ顔ぶれの出演者による放送が定時で再放送された。これらは録音されたアセテート盤が繰り返し放送に使われたのではないかと推測される。

海外放送はヨーロッパ向け、南米向け、北米東部向け、北米西部とハワイ向け、東洋向けに送出されていた。原則として生放送中心であったが国内放送の録音を使うこともあり、また一日100枚以上の音楽のレコードを使用した〔日本放送協会編 1940：170〕。放送対象の国によっては市販のレコードでまかなうことができず、24時間稼働している海外放送のスタジオに音楽家を長時間拘束するのも現実的ではない。国内録音でも事情はおなじで、同一の楽曲を放送するために何度も音楽家をスタジオに迎えるのは非効率的であった。こうした理由から生まれたのがAK盤である。

## 2. 収録内容の分析と利用目的

### 2-1 AK 盤の製作

AK 盤の製作は日本コロムビア蓄音器株式会社（現日本コロムビア株式会社）に委託された。そのためレーベルには「特別製造」の語句が記載されている。製造（プレス）は同社の川崎工場（神奈川県川崎市）で行われた。日本コロムビアのアーカイブから提供された情報によれば、AK 盤が製作された最も早い記録は1940年7月である。ただし録音された内容には1940年7月以前の音源も含まれている。

AK 盤の製作方法は3種類あった。

1. 現地からの中継放送を録音
2. 放送を収録したアセテート録音盤からダビングして原盤を作成
3. JOAK のアセテート録音盤からダビングして原盤を作成

AK 盤の収録内容でもっとも多いのは政治家の演説、戦地での戦況報告、儀式の実況中継などで、帝国議会、首相官邸、戦地、日比谷公会堂や皇居前広場、工場など現場からの中継放送を録音した音源である。

音楽や語り物、戦況説明などのコンテンツは放送時にアセテート盤に録音され、アセテート盤からダビングによってレコード原盤が作成されたものと推測される。その根拠として、大本営海軍報道部課長・平出英夫海軍大佐が放送した「海洋作戦の新展開」(AK-273~7)を挙げよう。10面にわたる講演はしばしば面の途中で原盤のアセテート盤が切り替えられている。アセテート盤を通常の規格のレコードにカッティングする際、時間的なずれが生じたものと思われる。

AK 盤の運用がはじまる前の録音も放送局に保管されていたアセテート盤からAK 盤にダビングされた。その例として、山本五十六の戦死を受けて1943年6月5日午後8時台に放送された「在りし日の山本元帥一軍縮予備交渉当時の国際放送録音」で流された山本五十六の肉声(AK-637)は1934年10月27日、ロンドン軍縮会議予備交渉に出席した際の国際放送を受信録音したアセテート盤からAK 盤に転写した音源であった。

また日本コロムビアの情報提供によれば、録音は内幸町の放送会館スタジオとコロムビアのスタジオの二箇所が混在するという。定時のシグナルや番組のジングルな

ど放送関連の音源はコロムビアが委託製作した可能性が考えられよう。放送スタジオで放送／録音されたレコードの特色として、服部良一が編曲・指揮する日本軽音楽団が録音した「或る日のモーツァルト」など3面（後述）、ニューオーダーリズムオーケストラが録音した「通りゃんせ」「木曾節」など4面はレコーディングスタジオではなく放送スタジオで録音されていることが明瞭に窺える一例である。その残響が豊かで立体的な放送会館スタジオのサウンドは、1940年12月18・19日に放送会館から放送と同時に道路を隔てた日本コロムビアでカッティングされた「紀元二千六百年奉祝楽曲」の録音群と同質のものである。明瞭な録音に特化したコロムビアのスタジオとは明白に異なる音響である。

レコードを製作するにはプレスするための原盤が必要であり、原盤には原盤番号（マトリックスナンバー）が付与される。AK 盤の原盤番号はカタログ番号に沿って推移する3桁から4桁の数字、Pのprefixを持つ3桁の数字、JOのprefixを持つ3桁の数字の3種類が確認されている。録音時や原盤作成時の条件によって原盤番号が使い分けられていたことが推測されるが、各々の原盤番号の有する意味については未詳である。

### 2-2 AK 盤の収録内容

AK 盤はすべて10インチ盤で、1940年7月から1944年12月にかけて計996枚が製作された（図1参照）。なお12



図1 AK 盤 (AK-265) (東京藝術大学附属図書館所蔵)

インチ規格の放送録音レコードはAKではなくA-20000番台のナンバーが付与された。通常市販される商業レコードと同様、AK盤の盤面には検閲のため内務省に納付した証である「納付済」印や特別税の税率を示す刻印、版数を示す刻印、原盤番号（マトリックスナンバー）9の刻印がみられる。AK盤はスタジオからの放送あるいはスタジオ外からの中継放送を同時録音した音源やスタジオ外での現地録音が多くを占めるが、放送に使用するために特にスタジオで録音された音源も混在している。12インチ規格のA-20000番台のレコードは判明する範囲で全てが放送時の録音である。

初期のAK盤は白レーベルでレーベル意匠はコロムビアの商業レコードの意匠をそのまま用いている。しかし間もなく赤レーベルでAK盤専用の意匠に移行した。AK盤の運用全期を通じてコロムビア・ブランドと1943年3月から使用されたニチック・ブランドがあり、両者は意匠が異なる。レーベル下縁に製作会社の記載があり、NIPPONOPHONE CO., LTD. →株式会社日本蓄音器商会→日蓄工業株式会社へと変遷が見られる。レーベルには収録内容、発表者・演者、カタログ番号、原盤番号が記載された。録音日あるいは放送日が記載されることもある。原則として放送時と同じ表題が記載されたが、稀に放送時と表題の異なるレコードがある。

放送用という特殊な目的のため、A面・B面のカップリングで編成される商業レコードと異なって、収録の都合による片面（シングルサイド）のレコードが数多く見受けられる。収録内容を最初に定めて計画的に制作した様子はなく、恣意的にレコード番号を振り当てたようであるが愛国詩や箏曲、アラビア音楽などシリーズ化した放送録音はナンバリングが連続してグループを形成している。内容の内訳は録音量の多い順に以下の通りである。

内容未詳 …… 237枚

講演・雑談・挨拶など …… 235枚

音楽（洋楽・邦楽） …… 169枚

実況録音・報道音源 …… 136枚

帝国議会 …… 133枚

シグナル・告知音楽・体操 …… 45枚

語り物（詩吟・朗詠・朗読など） …… 41枚

レコードの前後のつながりから式典や議会の録音の一

部と判断できる分を除いて、内容未詳のAK盤は237枚ある。AK盤のディスコグラフィ化に当たって内容未詳レコードのデータ補完は容易ではなく、製造元である日本コロムビアのアーカイブの協力を以てしても全996枚の内容を詳らかにすることは困難であった。向後AK盤の研究を進めるに当たっては、AK盤を用いた放送日の確定と並行して、欠落部分の情報を埋める作業が必須である。戦前戦後を通じて日本放送協会ではレコード資料に管理ナンバーが付与されてきちんと分類整理されていたことが、現存する旧JOAK所蔵レコードに貼付された管理ラベルから類推される（図2参照）。AK盤に関する放送局資料が現存すれば補完作業は大いに捗るであろうが、現在のところ当時の所蔵盤リスト等の資料の存在は確認されていない。



図2 市販レコードの放送使用の例（JOAKのシール貼付）

### 2-3 AK盤の利用目的

AK盤の利用目的は

- 収録した音源を何度も放送に用いるため
- 海外放送に用いるため
- レコード放送のレパートリー拡充

が挙げられる。

a. については放送開始・終了時のコールサインや定時放送の番組オープニング、落語番組の始まりと終了時の下座音楽、ラジオ体操などに毎回おなじ音楽を用いる必要から専用のレコードが製作された。伊藤昇（1903-1993）

作曲による全国放送の開始・終了と都市放送の開始・終了 (AK-145), 海外放送開始と終了コールサイン (AK-215) はじめ各種番組のオープニング曲やシグナルが制定されて1940年1月1日より放送に用いられた。ただしAK盤のもっとも早い製作時期は1940年7月なので、コロムビアで委託製作した専用レコードがのちにAK盤に組み込まれた可能性がある。現時点でコールサイン、シグナル、番組開始・終了などの告知用音楽が32面48種類確認されている。

各種コールサインだけでなく、儀礼的な喇叭吹奏 (AK-256～264) や鳥の啼声 (AK-170), 猫の鳴声 (AK-501～504), 赤ん坊の泣声 (AK-505～507) など実用的な効果音レコードもAK盤に編入された。また太平洋戦争開戦後に発表された一連の愛国詩 (AK-393～401) も複数回の放送使用を想定して製作されたと考えられる。

太平洋戦争開戦後は帝國議会のダイジェスト録音や首相演説、軍事解説を再放送する必要上、録音したアセテート盤からAK盤にダビングされた。一例として、開戦直後に放送された「大東亜戦争記念 其の朝の感激」(AK-252～253-A) は、1942年1月8日より6月8日まで毎月8日の大詔奉戴日に午前7時20分から定時放送された(ただし4月を除く)。またAK盤の一部は市販されている。たとえば1943年6月16日午後7時より放送された「第八十二回帝國議会 東條内閣総理大臣施政方針演説」(AK-712～716) は、ニッチク(コロムビアの1943年3月以降の呼称) 100771～100775として1943年10月臨時発売された<sup>2</sup>。

b. に関しては日本放送協会が行なった海外向け放送の変遷について知らねばならない。日本放送協会が初めて海外へ電波を送出するのに成功したのは1930年10月26日、ロンドン軍縮条約成立祝賀の交換放送であった。その後アメリカや東洋、ヨーロッパ諸国と交換放送を重ねながら国際放送設備の拡充を図り、1935年6月1日に海外放送が開始した。放送対象は、①ヨーロッパおよびアフリカ西部(英、仏、独、イタリア、ベルギー、オランダ、スペイン、チェコ、スウェーデン、ノルウェー、スイス、ポーランド、ソヴィエト、アフリカ西部)、②南米、北米東部、③南洋、植民地、ジャワ(華南、香港、タイ、インドシナ、マレー、ボルネオ、東インド、インド、フィリピン、南アフリカ)、④北米西部、ハワイ(カナダ、中央アメリカ、南米北西部、ハワイ)にわたった。

1938年に国際課が国際局に格上げされ、さらに放送対象地域を広げた。1941年9月からは大東亜共栄圏の確立を目指して英語放送と中国語放送の拡充強化がなされた。放送地域の現地時間に合わせて放送するため、放送会館はほぼ24時間各地域方面への放送を行なった。海外放送のプログラムはニュース、講演、実況、演芸、音楽から成り、放送対象の国の音楽も用いる必要があった。AK盤には判明している限りではイランなど中近東(AK-7～19)、アラビア(AK-568～585)、インド(AK-586～603)の音楽が相当数含まれており、海外放送に用いられたと推測される。在留邦人の多いアメリカやハワイ向けの放送には日本音楽が選ばれることが多かった。

AK-158～AK-160の3枚6面製作されたニューオーダーリズムオーケストラは1940年、日本放送協会が海外放送のために編成したスウィングオーケストラである。楽団名は「新体制」の英訳で、ジャズ評論家の野川香文が命名したと言われている。仁木他喜雄、佐野鋤、山田貴四郎、杉井幸一、大森盛太郎といった人々がアレンジを手掛けた。大森盛太郎はこのオーケストラの編成時期について「太平洋戦争突入間もない昭和17年初頭」と述べているが[大森 1986: 265]、1941年6月29日にはすでに国内放送に姿を現している。AK盤の作成も1941年2月で大森証言より早い。現在分かっている限りではニューオーダーリズムオーケストラのように明確に海外放送用素材と分かる録音はごく少なく、内容未詳の欠番レコードにこの種の音源が含まれていた可能性を指摘しておきたい。

海外原盤からAK盤にダビングされたレコードが現在のところAK-800番台からAK-900番台にかけて4枚確認されている。トミー・ドーシー&ヒズ・オーケストラのジャズナンバー(AK-843)とテディ・ポウエル&ヒズ・オーケストラ(AK-873)のボーカル曲、ザビア・クガート&ヒズ・ワルドルフ・アストリア・オーケストラのラテンナンバー(AK-899, AK-924)は、いずれもアメリカ・ビクター原盤からダビングされた。その多くは日本ビクターからすでに発売されていた音源であるが、AK-843-A「HOW CAN YOU FORGET」(1938年1月27日録音。/カップリングの内容未詳)、AK-873-A「I CAN'T RUB YOU OUT OF MY EYES」(1940年12月4日/カップリングの内容未詳)、AK-899-B「NOCHE DE RONDA」(1940年10月1日録音)は日本未発売の音源であった。ト

ミー・ドーシー楽団もザビア・クガート楽団も日本ビクターのアーティストとして一般的に認識されていた（クガートは1940年10月にコロムビアに移籍した）から、放送目的のためにビクターの原盤権を逸脱してニッチクでAK盤に転写されたことになる。その作成時期は日本コロムビアにデータが現存しないため詳らかではないが、前後のナンバーから類推して1943～1944年にかけて作成されたものと思われる。アメリカで傍受され録音されていた「ゼロ・アワー」にはディスクジョッキー形式でアメリカのジャズ・ポピュラーミュージックがふんだんに用いられており、対米謀略放送の必要から特例的に他社の音源をニッチクでAK盤に組み込んだのであろう。同種のAK盤としてほかにアーティー・ショウ楽団、ベニー・グッドマン楽団、チャーリー・バーネット楽団、サミー・ケイ楽団などビクターの専属アーティストの音源があったという [大森 1981]。アーティー・ショウやベニー・グッドマンは戦前から本邦でもよく知られていた人気バンドであるが、1940年代にアメリカの音楽シーンに台頭したチャーリー・バーネット楽団、サミー・ケイ楽団が日本で広く聴かれるのは戦後のことである。戦前期にかりうじて輸入されたアメリカ盤か、開戦後にシンガポールなどの占領地で鹵獲されたレコードからダビングされたのであろう。現状で情報の欠落しているAK800～900番台にこれらの海外録音が充当されていたのではないかと推測される。800番台から900番台まで100枚弱もAK盤の情報が欠落しているのは、戦時下に海外楽曲の音楽著作権や原盤権を無視して放送用にレコードを複製した点を戦後に進駐軍から問題視されることを避けて資料類が処分されたためではないだろうか。

c. に関しては1942年の放送事業を総括した『ラジオ年鑑 昭和18年』に「レコード放送の時間に、市販レコードのみでなく、協会製作のレコードが多数加はつて来た事は本年度の特色である」(p. 64)と報告されており、AK盤が積極的に放送に使用されていた様子を示す。同年鑑には1942年6月現在の番組編成を記録した「放送事項別放送時刻実施細目表」が掲載されているので、そこから一日のレコード使用番組を抜き出して図1に示した。

図1からわかるように、番組前後のシグナルのほか、番組のつなぎ時間や放送のない休憩時間（戦前のラジオ放送は番組のある時間のみ放送し、それ以外の時間は休止していた）に音楽レコードを流していた。同年鑑によ

05:50	- ニュース後06:00まで音楽
06:00	- シグナル及び体操
06:15	- 体操に引き続き06:30まで音楽
06:30	- 講演の冒頭の音楽
07:00	- ニュース後07:48まで音楽
07:50	- 体操の前後の音楽
09:00	- 「戦時家庭の時間」冒頭の音楽
09:25	- 10:00まで音楽
10:00	- 「幼児時間」冒頭の音楽
10:10	- 「幼児時間」に引き続き10:30まで音楽
11:00	- 学校放送シグナル及び音楽
12:00	- ニュースに引き続き12:30まで音楽
12:30	- 「演芸・音楽」に引き続き13:00まで音楽
13:00	- 「朗読」に引き続き13:30まで音楽
14:00	- 「学校放送」シグナル及び音楽
14:30	- 職場向体操の前後の音楽
16:00	- 「学校放送」シグナル
17:00	- ニュースに引き続き17:25まで音楽
18:00	- 「少国民の時間」に引き続き18:30まで音楽
18:33	- 18:50まで音楽（週に三回程度）。
18:50	- 18:59まで音楽
19:00	- ニュースに引き続き19:30まで音楽
19:45	- 講演に引き続き20:00まで音楽 （火・水・木は国民合唱）
20:00	- 「軍事発表」シグナル
22:00	- ニュースに引き続き22:30まで音楽（国際放送のない時）

図1 1942年6月の番組表

れば1942年は休憩時間のレコード放送を除いて一日平均、全国放送で150分（13回）、都市放送（第二放送を1939年に改称）で260分（9回）音楽レコードが放送された。第二放送はそもそも教育放送を主としたプログラムでレコード音楽の時間が設けられていたため、全国放送よりもレコードの使用率が高かったのである。こうした時間に使用するレコードは市販レコードでまかなわれていたが、1941年12月8日に太平洋戦争が開戦して以降はアメリカ、英国など敵国の音楽の使用が制限されたことにより、使用できるレコードも限られた。そのために放送用の音源がAK盤で製作されたのである。AK盤に22面も含まれる箏曲（AK-777～807）やわらべ歌、俗曲などのピアノ独奏（AK-611～619）は国内放送の休憩時間やレコードの時間、海外放送に用いられたものと思われる。

### 3. AK盤の作成年月と放送日について

AK盤の作成日と放送日に関するデータは「れきおん（歴史的音源）」と国立国会図書館音楽・映像資料室所蔵レコードのメタデータに含まれるほか、日本コロムビアのアーカイブに残されており、双方合わせて525面の作

成年月および一部の放送日が判明している。ここでいう「作成年月」とは AK 盤のレコード原盤が作成された時期を指し、必ずしも録音日とは限らない。作成年月にはいくつかのパターンがある。

もっとも多いのは、放送日の年月と作成年月が合致している場合である。そもそも大多数の AK 盤メタデータに記録されているのは作成年月までで、作成日と放送日の照合が可能な例は僅少である。1941年10月作成の「大命を拜して」（内閣総理大臣 陸軍大将 東條英機 / AK-195）は同年10月18日、東條内閣が成立した当日放送されているので作成年月と放送日が一致していることになるが、この記録からは「作成年月」が放送を録音した時を示すのか、アセテート盤などの元素材からダビングして AK 盤の原盤を作成した時を示すのかは判断しがたい。一龍齋貞山の講談「太閤記の内『大徳寺焼香の場』」（AK-809～812）は1941年9月9日作成で、同日午後8時10分から放送された。同じく一龍齋貞山の「赤穂義士銘々傳『吉良邸討入』」（AK-813～825）は1941年12月14日に作成され、同日午後8時20分より放送された。これらは作成日と放送日が合致した稀な例であり、少なくともこの2例については「作成日」が放送時の録音であることを意味している。

AK 盤の作成日が放送日より後のパターンも多く見受けられる。とりわけ AK-393～394, AK-400～401にまとまっている愛国詩の朗読レコード群はデータが1942年9月に作成されたが、その放送日はまちまちである。すなわち「a：最低にして最高の道 b：その母」（丸山定夫 / AK-393-A）は1942年1月23日放送、「a：建設の歌（下） b：眞住吉の神」（a：丸山定夫 / b：中村伸郎 / AK-401-A）は同年7月6日放送、「鉄鋌をうつ」（丸山定夫 / AK-393-B）は同年7月15日放送、「声」（中村伸郎 / AK-401-B）は同年7月27日放送で、いずれも放送日より後に AK 盤が作成されている。一方、「この糧」（中村伸郎 / AK-394-A）、「b：吾が子に」（中村伸郎 / AK-394-B）は同年9月27日の放送で、作成年月と一致する。愛国詩の放送を続けるうちに再放送の必要が生じ、1942年9月に至って再生耐性の高い AK 盤にダビングされたのであろう。坪井によれば一連の愛国詩は再放送多数である由で、再放送時に AK 盤が用いられたものと思われる [坪井 1997：付録14-42]。

1941年8月16日午後8時5分から放送協会撰定「ラジ

オの歌発表」で放送された「電波の力」（片山穎太郎＝指揮、日本放送合唱団・東京放送管弦楽団 / AK-208あるいは A-211）は放送から4ヶ月も経った同年12月に AK 盤が作成されている。この場合は8月16日放送時に録音されたことを示す年月ではなく、放送時に録音したアセテート盤からダビング作業で原盤を作成した時期を指すことが推測される。あるいは再放送時の録音である可能性もあるが、『邦人楽曲放送一覽 第3冊』（p.109）には再放送は記録されていない。

服部良一（1907-1993、指揮）が日本軽音楽団の演奏により1940年12月11日午後8時台に都市放送で放送した軽音楽は

- (イ) 福井文彦 作曲－佐野鋤 編曲：興亜行進曲 (AK-101)
- (ロ) 軍事保護院陸海軍省撰定－谷口又士 編曲：国民進軍歌 (AK-101)
- (ハ) 瀬戸口藤吉 作曲－佐野鋤 編曲：軍艦行進曲 (AK-102)
- (ニ) 服部良一 編曲：ハイドンのセレナーデ (AK-102)
- (ホ) 服部良一 編曲：或る日のモーツァルト (AK-103)
- (ヘ) 服部良一 編曲：悲愴 チャイコフスキー作曲

とプログラムの全6曲中、5曲が AK 盤となっている。一連の AK 盤の作成年月は放送日より後の1941年2月である。1941年2月2日午後9時10分の軽音楽プログラムではおなじ服部良一（指揮）日本軽音楽団による「或る日のモーツァルト」「興亜行進曲」が、同年5月9日午後12時5分の軽音楽の時間にも同じ顔ぶれで「或る日のモーツァルト」「国民進軍歌」が放送された。このパターンで作成年月が指し示すのは、1940年12月11日の放送を録音したアセテート盤から AK 盤が作成され、1941年2月2日の放送に使われた可能性である。あるいは1941年2月2日の放送が録音されて AK 盤に使用されたという考え方もできよう。また、この2つの放送に含まれる「チャイコフスキーの思ひ出（5月9日放送では憶ひ出）」も勘ぐれば1940年12月11日放送時の「悲愴」の録音が用いられたのかもしれないが、「悲愴」の AK 盤の有無については現時点で未詳である。

ごく僅かだが放送日より前に作成年月が記載されているパターンもある。「日獨伊三國同盟條約要旨（上・

下) (外務省情報部長 須磨彌吉郎 / AK-77) は1940年9月に作成され、同年10月4日午後9時の時事解説の時間に「日独伊三国条約の意義」の題名で放送された。放送に備えて事前に録音されたと思われる。「明治天皇御製(一)(二)」(山田積善, 伊藤長四郎 / AK-340) は1942年6月に作成され、同年11月3日午前7時台に放送された記録がある。ただしこれが初放送であるかは未詳である。AK 盤の作成日と放送日の関連性を探るためには放送日の確定が不可欠であり、歴史的音源所蔵機関ネットワーク(レキレコ)でAK 盤のディスクグラフィ化とともに放送日確定も進めているが、戦時下の新聞に掲載されていた簡素なラジオ欄から読み取ることができる情報には限界がある。詳細な放送番組資料によるさらなる調査が必要である。

## おわりに

本稿に述べたように AK 盤には未詳の部分が少なくない。しかし現時点で判明しているデータと分からないデータを明らかにしたことで、向後の AK 盤研究に資するという本稿の目的は達成せられたと考える。最後に AK 盤研究を共に進めた「歴史的音源所蔵機関ネットワーク」(レキレコ)、貴重な情報を提供して下さった日本コロムビアのアーカイビング担当 斉藤徹氏、そして AK 盤の所蔵調査に協力いただいた東京藝術大学附属図書館および昭和館に謝意を表す。

## 注

1 筆者らが主催する歴史的音源所蔵機関ネットワーク(レキ

レコ)によるシンポジウム「ラジオ放送とレコードの関わり～戦時下の音の記録・AK 盤～」(2023年2月18日, 放送文化基金助成研究報告シンポジウム, 於:九州大学総合研究博物館)での発表内容に基づき追加調査の成果を加えた。なお AK 盤に関する統計データについては基本的に発表時のものを使用した。

2 九州大学総合研究博物館蔵の SP レコードのなかに、東條英機の声が入ったレコードが3タイトル7枚(14面)確認できたが、ニッチク100771～100775は所蔵していない。

## 参考文献

- 大森茂「ザビア・クガートの戦前日本発売全レコード」、『レコード・コレクターズ』1巻1号, pp.14-21, 1981.
- 大森盛太郎「日本の洋楽 I」, 東京:新門出版社, 1986.
- 『官報』1934年5月2日(第2197号).
- 坪井秀人『声の祝祭』, 愛知:名古屋大学出版会, 1997.
- 日本放送協会『邦人楽曲放送一覧 第3冊(昭和5-17年)』, 東京:日本放送協会業務局資料室, 1943.
- 日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和16年』, 東京:日本放送出版協会, 1940.
- 日本放送協会編『ラジオ年鑑 昭和18年』, 東京:日本放送出版協会, 1942.
- 増井敬二・三善清達・後藤和彦「洋楽放送五十年① ラジオはこうして始まった」, 『音楽の友』32巻1号, pp.93-95, 1974.
- 「洋楽放送五十年⑩ 向上期の洋楽放送(中)」, 『音楽の友』32巻10号, pp.94-99, 1974.
- 山崎整「関西発レコード120年(5)本格テープの誕生まで」, 『神戸新聞』, 1998年9月15日.
- NHKアーカイブス「アーカイブス編:ラジオの時代の貴重な資産」(2023年11月11日最終閲覧) <https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=C0010305>

Received Dec. 24, 2023; accepted Jan. 4, 2024

## Regarding the Formation Process of AK-discs and Their Use in Radio Broadcasting: A Study Based on Discography

Masato MORI<sup>1)</sup>, Mariko OKUBO<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Record historian and Institut für Japan- und Koreanistik, Universität Bonn

<sup>2)</sup>The Kyushu University Museum  
Hakozaki 6-10-1, Higashi-ku, Fukuoka, 812-8581 Japan

AK-disc is the standard name for broadcast-only records used by the Japan Broadcasting Corporation (=NIPPON HOSO KYOKAI) for radio broadcasts in the 1940s. The name is taken from the Japan Broadcasting Corporation's call sign "JOAK". Note that AK was also used as the prefix for educational records issued by Nippon Columbia after the war, but this has nothing to do with AK records for radio broadcasting, and it is necessary to distinguish between them. This article examines the process by which the AK board was created, its operation, and the correlation between its creation time and broadcast date.

**Key words:** disc (78 rpm), AK-disc, JOAK, radio broadcast